「第 1 回中高生日本語研究コンテスト」の報告と今後に向けて

中高生日本語研究コンテスト実行委員会
委員長　田中牧郎

1.　第 1 回コンテストの概要

今期執行部では、若年層に日本語研究を普及し、長期的に若手研究者を育成する土壌を作ることを目指しています。これは、会員数の減少に歯止めをかけなければという問題意識に発した動きですが（近藤泰弘「新会長あいさつ――今期執行部方針について――」日本語学会ホームページ）、まず 2021 年夏に「ジュニア会員制度検討ワーキンググループ」を設置して検討を開始し、これを「ジュニア研究者育成制度検討委員会」に改組し、具体的な施策の一つとして、中高生を対象とした日本語研究のコンテストを実施することを決めました。その後、広く会員から協力者を募って議論を重ねて実施要項を固め、「中高生日本語研究コンテスト実行委員会」を組織して、広報やサポートの体制を整え、2022 年度に第 1 回コンテストの開催に漕ぎ着けました。ここまでの経緯は、本誌 18 巻 2 号（2022 年 8 月）で報告しました。

第 1 回のコンテストは、2022 年 9 月 1 日から 9 月 30 日を応募期間として、研究の着想や方法を中心に研究計画までを発表する「アイデア部門」と、研究を実施し分析結果を示し結論までを発表する「リサーチ部門」の 2 つの枠組みに、それぞれ、5 分程度、10 分程度のプレゼンテーション動画を、中高生から投稿してもらう形で実施しました。

アイデア部門 44 件、リサーチ部門 23 件、あわせて 67 件の応募があり、その内訳は、中学生が 12 件、高校生が 55 件で、参加学校数は 30 校でした。また、個人による作品が 41 件、2 人以上のグループによる作品が 26 件ありました。

事前に予想していた以上の数の応募があり、たいへん嬉しい結果になりました。高校生が大半になるかもしれないと思っていましたが、中学生からも少なからず応募があり、日本語の研究は中学生でも十分に行えることもわかりました。また、中学・高校の先生を通した応募による、学校の活動の中で取り組んだものが多かった一方で、中高生自身や保護者を通した応募による、個人で取り組んだものも多く、そのどちらにも優秀な作品が多数見られました。

2.　応募作品のタイトル

どのような研究が応募されたかを知っていただくために、部門別に全応募作のタイトルを分類して示します。

【アイデア部門】

《音声》日本語には存在しないが受ける音の研究／聞き取りやすい日本語　《文字・表記》漢字における旧字体と新字体の認識について／日本語と漢字表記の国名／心に響く！名前の説明法の研究　《語彙》略語の傾向について／「シャーペン」は「鉛筆」に含まれるか——語形が左右する認知——／「推し」と「恋心」／推しの理解とその後／勉強とはなにか　《文法》助詞の働き　《文章・表現》『風と共に去りぬ』スカーレットにとって「タラ」の土地とは？／在日朝鮮人文学に見られる同胞の葛藤——李良枝『由熙』——／被爆した作家とそうでない作家の間に現れる原爆に関する描写の差異／古典文学における猫の怪異について／『お伽草紙』に表れる太宰治作品の人物造形／「言葉探しの旅」——人を惹きつけるキャッチコピーとは——／文末の絵文字と文脈の関係／ジェンダーとことば　《談話》謝罪文の伝わり方とは？／状況によって印象が変わる言葉／ほんとにあってる？バイト敬語　《新語・流行語・若者語》SNSから生まれた日本語／「死語」——流行語はいつ死語になるのか——／死に絶え続ける言葉／やばい／「ヤバイ」の持つ意味／「ヤバい」と言う言葉は本当にヤバい／キモいときしょいの差／エモい写真を撮って人気のインスタグラマーになろう!!／エモいの定義とは／世代間における「笑う」を文面上であらわすときの表現方法／草wwwの最上級を自分で作っても伝わる説　《日本語史》「かしら」の変遷を追う／「切ない」の意味変化とその要因　《方言》東祖谷の方言の魅力を知ろう／埼玉県内の一人称にはどのような違いがあるのか／首都圏出身者から見た岩手の不思議な表現／奄美語を廃れさせないために／世界一受けたい関西弁 1限目「ちゃう」《対照・翻訳》“The Great Gatsby”会話文に見る翻訳者ごとの登場人物像／言葉遊び 日本と外国の違い／日本語と日本手話のずれ／はやりことばの手話化

【リサーチ部門】

《文字・表記》効率的な漢字学習法の検討／旧字体に迫るんだ　《語彙》漠然とした意味を持つ形容詞の使い分け／コロケーションと構文から見えてくる名詞化接尾辞「〜み」の効果／桃太郎の桃はなぜ「どんぶらこ」と流れなければならなかったか／少年漫画におけるオノマトペの比較／お菓子のオノマトペ　《文章・表現》「ものづくし」における修辞・技巧的表現の研究／「海道記」の自然描写について／奇を衒う／小説とライトノベルの比較　《談話》すみません　《新語・流行語・若者語》一度流行した言葉はその後も使われ続けるのか？／敬語とタメ口／若者言葉が使われる要因について　《日本語史》日本語の一人称代名詞の特徴——『日本国語大辞典』収録語彙から——／キラキラのアイドルって何？　《方言》方言は、変わり続ける。／古典学習と地域方言の関係性についての研究——徳島県三好市西祖谷山村方言の否定・可能表現を例に——／あのおじいちゃんはどこの人なの？　《言語行動》災害時、外国人住民への地域の対応　《対照・翻訳》時間とあいさつの関係性に関する外国との比較／受動態に対する日本と外

国の比較
《語彙》《文章・表現》《新語・流行語・若者語》に分類されるものが多くなっており、身近な言葉への関心や国語科の学習活動から着想を得た研究が行われやすいのではないかと思われました。全般に独創的で意欲に満ちた作品が多く、日本語への強い関心や深い愛着を持って研究に取り組んだことが伝わってきました。

3. 審査と表彰作品

投稿された作品は、実行委員と理事あわせて 28 名の審査員により、次の観点で審査しました。アイデア部門は、問い（課題）の設定、調査や研究の方法、発表の仕方の 3 つ、リサーチ部門は、これらに、考察の展開、結論の導き方を加えた 5 つの観点です。審査の結果、アイデア部門では、最優秀賞 1 件、優秀賞 5 件、奨励賞 3 件、リサーチ部門では、最優秀賞 1 件、優秀賞 4 件、奨励賞 1 件の、計 15 件を表彰することとなり、10 月 29 日にオンラインで開催された日本語学会秋季大会の式典で表彰式を行いました。表彰式では、すべての受賞者に一言ずつスピーチをしていただきました。

以下に、公開している講評文の一部を紹介する形で、表彰作を概観します。

【アイデア部門】

〇最優秀賞

・吉本麟太郎（神奈川県立横浜翠嵐高等学校）「日本語には存在しないが受ける音の研究」
　音楽を聴いていた時に感じた疑問をもとに、「現在標準的な日本語の発音として用いられない音の中に、メロディーに乗せた際に評価される音はあるか。どのような音か」という問いを立て、これを明らかにする具体的な研究方法を提案するもの。

〇優秀賞

・亀岡高校探究の鏡（上芝海人・川瀬芽依・中川翠優・中西晴友・本田佳子；京都府立亀岡高等学校）「「言葉探しの旅」――人を惹きつけるキャッチコピーとは――」
　よく見かけるキャッチコピーを収集し、それらの分別（整理）を通して、その言葉にどのような特徴があるのか多角的な分析を行おうとするもの。調査に先立ち、コピーライターへのインタビューや、キャッチコピーを自作する活動を通して、問題を整理している。

・齋藤向太（東洋大学附属牛久高等学校）「「切ない」の意味変化とその要因」
　英訳が難しく一語では訳せなかったという経験をもとに注目した「切ない」という言葉について、その意味が最近変化していることを確かめ、その変化の具体的なありようを、文献調査とアンケート調査によって研究する構想を、仮説を明示して検討するもの。

・髙田彩夏（明晴学園中学部）「日本語と日本手話のずれ」
　日本手話の〈頭／下がる〉が、日本語の「頭が下がる」とは全く異なる、思考停止

の意味であることなど、興味深い事例を取り上げて、日本手話の語彙と日本語の語彙とを対照する調査・分析を行おうとする、日本手話が母語である発表者ならではの視点からの研究。

・千葉柊弥・永田悠真（広島学院高等学校）「聞き取りやすい日本語」

部活動でよく聞く気象通報の人口音声の聞き取りやすさに興味を持ち、その不思議を解明することを目的に、語と語との間隔や、アクセントやイントネーションの変化の観点から、録音した音源を編集して、その音声への違和感をアンケートで確かめる実験の構想。

・宮下敦行（神奈川県立横浜翠嵐高等学校）「「シャーペン」は「鉛筆」に含まれるか――語形が左右する認知――」

日本語話者の語彙体系ではシャーペンは鉛筆に含まれないのではないか、「シャーペン」に含まれる「ペン」という構成要素からシャーペンはペンだと認識されているのではないか、という 2 つの仮説を立てて、仮説を検証する形で豊かな考察を展開するもの。

〇奨励賞

・宇部フロンティア大学付属香川高等学校チーム YABAI（花田英叶・錦織大介；宇部フロンティア大学付属香川高等学校）「「ヤバイ」の持つ意味」

近年さまざまな感情を表す「ヤバい」という語の使われ方を観察してその意味を整理し、それぞれの意味で使われた再現映像を作って、それを視聴した人が「ヤバい」をどのような意味と判断するかを、アンケートによって把握する調査研究の構想。

・福留好香美（九段中等教育学校）「心に響く！名前の説明法の研究」

「名前の漢字のよい説明法は？」という身近な問題意識から、漢字の読みや構成・意味などを観察し、個々の漢字に対するよい説明のしかたを導き出すために、「よい印象を与える」「わかりやすい」という観点から研究のアイデアを展開。

・安田湖夏（東京都立武蔵高等学校附属中学校）「「かしら」の変遷を追う」

近代小説で出会った「か知らん」が、現代の「かしら」と違う形をしていることと、女性が主に使う現代と違って男性目線で使われていることに興味を持ち、近代から現代への「かしら」の変遷を明らかにする、文献を対象とした用例調査を計画するもの。

【リサーチ部門】

〇最優秀賞

・桜木陽也（栄光学園高等学校）「コロケーションと構文から見えてくる名詞化接尾辞「み」の効果」

近年の新語「わかりみ」などの名詞化する接尾辞「み」によって作られた名詞が、ほかの一般的な名詞とどう異なるかを、名詞と形容詞のコロケーションが、終止用法と連体用法のどちらの構文でよく使われるかを、コーパスを用いて調査する方法で研

究している。

〇優秀賞

・須田葵葉（東京都立西高等学校）「「ものづくし」における修辞・技巧的表現の研究」

『枕草子』、『梁塵秘抄』、近世浄瑠璃作品を対象に、「ものづくし」の表現を抜き出し、そこに見られる修辞法を、「韻を踏む」「掛詞」「配列の工夫」などの表現技法に分類して、作品ごとの特徴を明らかにする研究。

・徳島県立池田高等学校探究科 3 年方言班（西村善・岡七美・内山由惟・北原悠希・保元麻衣；徳島県立池田高等学校）「古典学習と地域方言の関係性についての研究――徳島県三好市西祖谷山村方言の否定・可能表現を例に――」

古典を学ぶ中で、地元徳島県の方言の中にある言い方が、不可能を意味する「え〜ず」や「ざった」のような古語に由来する事実を知り、地元の山間地域でフィールドワークを重ね、これらの言い方がどの程度残っているのかを調査研究している。

・橋本知佳（茨城県立勝田中等教育学校）「キラキラのアイドルって何？」

「きらきら」の意味について、物理的か内面的かという観点を中心に、アンケート調査と語史調査を行って、その多面性を研究。アンケートでは意味の多面性を可視化し、語史調査では「きらきらし」「綺羅星」など関連語との関係を解明している。

・渡辺佳子（公文国際学園高等部）「桃太郎の桃はなぜ「どんぶらこ」と流れなければならなかったか」

昔話「桃太郎」に使われる「どんぶらこ」という語が、どんな様子や動きを表す擬態語であるかを確認し、水の中で果物や野菜がどんな様子にあり、どんな動きをするかを実験し、「どんぶらこ」の表す様子や動きは、桃のそれともっとも近いことを証明した研究。

〇奨励賞

・佐久間佳乃・遠藤優夏（岩手大学教育学部附属中学校）「少年漫画におけるオノマトペの比較」

少年漫画 2 作品から、オノマトペをすべて抜き出し、語頭の音で分類したり、手足の動きや強調表現との関係を観察したりして、その語形と使用場面の特徴を研究。研究の結果を踏まえて、オノマトペの効果を生かした漫画作品の創作にも挑戦している。

4.　作品の評価

3 で内容を紹介した表彰作は、いずれもたいへん優れた研究で、日本語学の方法にのっとって調査計画を立てたり、考察を展開したりしているものも少なくありませんでした。また、方法には未熟さを感じさせるところがあっても、着眼の斬新さにうならされるもの、現象の解釈や問いの立て方がとても面白いものなど、作品ごとに異なる良さを

持っていると感じました。これらの表彰作はすべて、本人から許諾を得て本コンテストのサイトで公開していますので、ぜひご視聴ください。

なお、表彰には至らなかった作品にも、優れたものがたくさんあり、ここをこうしたらとてもよくなるだろうとか、ここに注目するともっと掘り下げられるだろうとか、研究者としてサポートをしてあげたいと感じるところが多くありました。応募作すべてについて、評価できる点と、今後の研究に向けた助言を記したコメントを作成して、参加証とともに応募者に送付しました。コンテストを通して、日本語を研究する中高生と日本語学の研究者とが双方向的にやりとりすることが、若年層に日本語研究を普及することにつながり、延いては社会における日本語に関するリテラシーを高める効果をもたらすことを期待したいと思います。

5.　開催記念シンポジウムの開催

日本語学会が中高生を対象とするコンテストの実施に乗り出した背景には、若年層に日本語研究を普及したいということのほかに、中学・高校における国語教育の現場に貢献したいという思いもありました。中学・高校の側からは、その教育活動に生かせる形で、日本語学会の活動が展開されることを望んでいるということもあるように思われます。コンテストを通して、日本語学と国語教育との新たな関わり方を考えていければと考えました。

このことを広い視野から考える機会を作るために、シンポジウムを企画することとし、2022 年 12 月 11 日（日）に、「第 1 回中高生日本語研究コンテスト」開催記念シンポジウム「日本語学と国語教育」を、オンラインで開催しました。対談とパネルディスカッションから構成されるシンポジウムでした。

対談は、「国語教育と日本語学の新時代にむけて」というタイトルで、日本語学会の近藤泰弘会長（青山学院大学）と、国語教育学者（全国大学国語教育学会理事）の難波博孝氏（広島大学）によって行われました。近藤氏が安良岡康作先生の国語科教育法の授業に魅了されたこと、難波氏が渡辺実先生の日本語学の教養ゼミに楽しく参加したことなど、相手側の領域にも深く親しんでいた学生時代の思い出から話がはじまり、日本語学界と国語教育学界とが、中学・高校の現場を介してどのように連携できるのか、昨今の学術や社会の動向とも関連づけながら、将来に向けた様々な可能性が語り合われました。

パネルディスカッションは、「中高生と日本語学」というテーマで、5 つの講演とそれを踏まえたディスカッションが行われました。各講演のポイントを紹介します。

・安部朋世氏（千葉大学）「平成 29・30 年告示学習指導要領における「言葉の教育」と日本語学」

現行の学習指導要領の内容を、小学校から高等学校まで体系的に紹介し、そこに

日本語学がどう関わっているのか、明解に解説してくださいました。日本語研究者が国語教育について考えたり発言したりする場合、学習指導要領の基本的な考え方やその体系性について知っておくことの重要性がよくわかり、中高生日本語研究コンテストが学校現場に無理なく受け入れられるものにするための多くの示唆も得られました。

・清田朗裕氏（大阪大学、大阪教育大学附属池田中学校）「国語教育学と日本語学をどうつなぐか――日本語学の知見を活用して国語の授業をつくる――」

高等学校の「言語文化」で実施することを想定して、『竹取物語』におけるかぐや姫から帝への手紙と翁への手紙を比較する授業と、『枕草子』初段の文構造や文章構成をとらえる授業の、2つのアイデアを具体的に提案してくださいました。いずれも日本語研究の基本的知見を組み合わせることで、たいへん魅力的な授業が作れそうだと思わせてくれる提案で、日本語研究者が国語科の授業作りに関わっていく可能性が明確に示されました。

・矢田勉氏（東京大学）「中高生が学術の発展に寄与するということ――日本語学の場合――」

中高生が日本語を研究することが、日本語学の発展にもつながることを、日本語の変種を広く記述してくれる側面と、職業研究者の弱点を補ってくれる側面から、明瞭に指摘してくださいました。そして、「しりとり必勝法」などの例を挙げながら、中高生が「日本語リテラシー」を身に付ける活動を通して、日本語学の知識を「面白く」社会に伝え、社会を感化する、中高生ならではの重要な貢献ができるという主張は、たいへんに刺激的で説得力に満ちたものでした。

・勝亦あき子氏（東京大学教育学部附属中等教育学校）「中高教員が日本語学に期待すること――エージェンシーの発揮と獲得に必要な条件を考える――」

卒業論文のある勤務校で司書教諭としても活動なさってきた経験によって培われた、中高生が前向きな気持で探究活動に取り組むにはどんな環境が必要かという問いをめぐる見識を、惜しみなく開陳してくださいました。多様なメディアと言語情報に満ちた図書館は「ことば」の宝庫であるという考え方に立つと、学校図書館を通して「ことば」の探究の場を育てる可能性が広がっていき、その場に「中高生日本語研究コンテスト」が関わっていく、理想的な将来図を思い描くことができました。

・田島幹大氏（徳島県立池田高等学校）、村上敬一氏（徳島大学）「中高生日本語研究コンテストに参加して――徳島県立池田高等学校探究科方言班の取り組み――」

今回のコンテストで優秀賞を受賞した池田高校の生徒さんの探究活動を指導なさった高校教員と、その活動のサポートに当たってこられた研究者による講演でした。高大を接続した探究活動をどのように行ってきたかについて、理念と実践の両

面から詳しく紹介してくださり、学校として探究活動に取り組む意義と課題がよくわかりました。コンテスト運営に対する具体的な提言もいただき、第 2 回に向けた改善の検討に生かせるものが多くありました。

ディスカッションでは、視聴者から書き込まれた質問・意見を画面で共有しながら、多様な論点での意見交換が行われ、いくつもの建設的な意見が共有されました。総じて、中高生の探究活動には教育的にも学術的にも大きな意義があること、そこに日本語研究者や日本語学会が絡んでいくべき領域が豊かに広がっていることが確認されました。また、コンテストを、中高生にとってより参加しやすいものにしていくためのアイデアも、次々に出し合われました。

参加者アンケートには、非常に詳細で前向きな意見が多数書き込まれました。日本語学と国語教育との連携への期待を詳しく記すものや、コンテストを発展させる具体的な提案を行うものが目立ちました。

今回のシンポジウムの内容は、2023 年度秋季大会で開催を予定している、日本語学と国語教育との関わりを学史的に考えるシンポジウムの内容と合わせて、書籍にまとめて出版することを計画しています。

6.　今後に向けて

以上のように、第1回コンテストは、参加してくださった生徒さんや指導してくださった教員の方々には、総じて好評でした。また、関心を持ってくださった日本語学会の会員や国語教育の研究者にも、その意義を評価していただけたのではないかと感じています。一方で、参加する中高生に偏りが見られることや、中学・高校の教育環境に溶け込んでいく難しさなど、様々な課題があることも見えてきています。

引き続き、中等教育における位置付けを工夫し、国語教員や国語教育研究者をはじめとした、会員外の人たちとの連携をいっそう密にしながら、活動を前に進めていきたいと考えています。この活動は、中等教育の教育現場に関わることを通した日本語学会の社会貢献になると考えられますが、日本語を研究することの社会的意義について、日本語学会の会員があらためて考える機会にもなると考えられます。社会貢献や社会的意義について考えながら、日本語研究を続けていくことが、日本語学の裾野を広げ、会員数減少の歯止めにもつながっていくのではないでしょうか。

中高生日本語研究コンテストは、2023 年度に第 2 回を開催することを決定し、その後も毎年 1 回続けていくことのできる体制作りにも力を入れています。2023 年 1 月の会員一斉メールで、実行委員やサポーターとして協力してくださる方を募ったところ新たに 10 名の会員の方から協力のお申し出をいただきました。その方々も含め、次のメンバーで活動を行っていきます。当面は、広報、審査、コンテンツ、サポート、シンポジウム、編集の 6 つの部会に分かれて、コンテストの持続と発展に向けた活動を行って

いきます。会員の皆さまからのご支援を、引き続きよろしくお願い申し上げます。

中高生日本語研究コンテスト実行委員会

委員；田中牧郎（委員長、編集部会長）、岩城裕之、河内昭浩、門屋飛央（サポート部会長）、清田朗裕、櫛橋比早子、久保博雅、小林隆、小林正行、斎藤敬太、佐藤栄作、山東功（シンポジウム部会長）、白勢彩子（審査部会長）、清水泰行、田中草大、津田智史（コンテンツ部会長）、冨樫里真、降籏みなみ、又吉里美、間淵洋子（広報部会長）、村上敬一、茂木俊伸、山下直、山下真里、山室和也

サポーター：荻野千砂子、小野春菜、栗田岳、小松雅彦、多田知子、林田定男、前田桂子、安井寿枝

参考 URL

中高生日本語研究コンテスト：https://junior-jpling.jimdofree.com/